

# 2014年度幹事報告

---

## 庶務幹事この一年

足立伸一（高エネルギー加速器研究機構）

前任の木村洋昭氏から学会庶務幹事を引き継いで、早や1年が経過しました。前々期の尾嶋会長のもとで編集幹事を担当させていただいた際に、庶務幹事であった原田慈久氏のご苦勞をそばで見させていただいておりましたので、私にはこの重責は果たせないなと感じておりましたが、はからずも今期の村上会長の下で庶務幹事を担当させていただくことになりました。全く至らぬ庶務幹事ですが、村上会長と優秀な幹事会メンバーに支えられて、微力ながらこの重責を果たして参りたいと考えております。今後ともよろしくお願いたします。

まず今期執行部が最初に取り組んだのは、日本学術会議科学者委員会・学術の大型研究計画検討分科会が公募した日本学術会議マスタープラン2014に対して、日本放射光学会から提案した「新しい時代の科学技術立国を支える放射光科学の高輝度光源計画」に関する案件です。この提案は、水木前会長の前執行部が中心となって、3 GeV クラスの中型高輝度放射光源建設計画および将来の X 線領域での回折限界光源計画の提案として取りまとめられたものであり、応募提案総数224件から、ヒアリング対象の66件に選ばれ、2013年9月20日に開催されたヒアリングの結果を受けて、66件の中から重点大型研究計画の27件に選出されました。この結果は、日本放射光学会が提案した3 GeV クラスの中型高輝度放射光源の実現が、学術の大型研究計画として特に速やかに実施すべき優先度の高い事案であることが認められたという意味で、学会の大きな成果

として挙げる事が出来ると思います。しかしながら、その後、2014年3月27日に文部科学省の科学技術・学術審議会において行われたヒアリングでは、残念ながら最終的にロードマップ2014に掲載される上位10件には選出されず、パブリックコメントの対象とはなりません。日本放射光学会では、2014年10月31日に日本学術会議の主催で開催された公開シンポジウム「中型高輝度放射光源に期待するこれからの科学技術」を共催させていただきましたが、今後もさまざまな機会を捉えて、放射光分野の大型研究計画の重要性を学術界、政府、一般社会全体に対して引き続き広く訴えてゆく必要があると考えます。

今期のもう一つの大きな課題となっているのは、学会設立当初から事務局をご担当いただいている(有)ワーズさんに関する案件です。ワーズさんは今後5年程度を目処に業務の終了を予定されており、これを受けて、今後の学会事務局の運営体制を抜本的に見直す必要があります。ワーズの西野さん、佐藤さんには、学会設立当初から現在に至るまで、多くの学会員の方々がいろいろな形でお世話になっていることと思います。これまでのワーズさんによる、学会に寄り添うような献身的な事務局業務に心より感謝しつつ、これまでの学会活動で蓄積された資産をスムーズに移行できるよう、次の1年間で方向付けをしてゆく必要があると考えております。学会員の皆様の一層のご協力をよろしくお願申し上げます。

---

## 行事幹事この一年

篠原佑也（東京大学大学院新領域創成科学研究科）

昨年の10月より行事幹事を拝命しております。村上会長からお話を頂いた時には、最初は何かの冗談かと思えました。というのも、水木前会長が学会運営に新しい風をとということで、若手と見なされる方々を前幹事としていたことは承知していましたが、外見はともかくとして私はそれらの方々よりさらに若いからです。かなり逡巡しましたが、若いことを免罪符に多少失敗をしても将来の糧とさせて頂くいい機会かとも思い、お引き受けすることにしまし

た。

この1年に実施した主要な行事は、第27回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム（JSR14）、第6回、第7回若手研究会、第6回放射光基礎講習会です。JSR14は広島国際会議場にて、松田巖組織委員長（前行事幹事）、谷口雅樹実行委員長、生天目博文副実行委員長、乾雅祝プログラム委員長のご尽力により、639名の参加者を得て大成功裡に終えることができました。皆様に深く御

礼申し上げます。

若手研究会と放射光基礎講習会に関しては、今号にて別途詳細な報告がございますが、ともに2009年度から始まった行事でこれまで継続して実施されてきております。若手研究会は例年は1件のみ採択するのですが、今回は審査委員会で甲乙つかずということで2件の採択といたしました。第6回として高橋幸生会員（大阪大学）、笠口友隆会員（慶應義塾大学）、星野大樹会員（理化学研究所）提案の「コヒーレント X線が拓く構造可視化の新しい世界」、第7回として山本達会員（東京大学）、高木康多会員、長坂将成会員（分子科学研究所）提案の「最先端オペランド観測で明らかになる物性科学」が採択されました。来年以降も若手会員からの積極的な応募をよろしくお願ひ申し上げます。一方、基礎講習会は「初心者のための放射

光入門講座」として東京大学にて開催しました。各講師の先生方にはお忙しいところ入念な準備のもとに素晴らしい講義をしていただき、深く感謝申し上げます。

年明け1月には第28回日本放射光学会・放射光科学合同シンポジウム（JSR2015）が立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて開催されます。全てにおいて至らぬ組織委員長を私を、太田俊明実行委員長、難波秀利副実行委員長、稲田康宏プログラム委員長、それから事務局の佐藤亜己奈さんにご支援頂きながら順調に準備が進んでおります。会員の皆様におかれましては、是非参加いただきJSR2015を盛り上げて頂きたいと存じます。

最後になりましたが、これからの1年間も皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

## 編集幹事この一年

木村昭夫（広島大学）

昨年10月より前任の玉作賢治氏（理化学研究所）より引き継いで、19名の編集委員メンバーとともに編集幹事をスタートいたしました。玉作幹事任中に冊子体の2色化（2012年5月より開始）等の大きな課題がすでに解決済みであったおかげもあり、少し楽なスタートを切らせていただきました。まずは編集活動方針として、これまでと同様に「分野のトピックスについてバランスよく、また他の分野の会員にも分かりやすく研究内容を伝え、放射光科学の発展に貢献する」ことを目的にかけました。委員会は年3回行われますが、それ以外の通常作業として、メーリングリストを利用した記事提案、承認、執筆依頼を行うことが主な流れとなりました。また連載記事として予定している「試料環境シリーズ」を充実させるべく、ワーキンググループ（船越委員、水牧委員、為則委員、富樫委員）を組んで引き続き進めていただいております。現状では第1回の「磁場」については完成いたしました。他のテーマの記事がある程度揃ってからの連載スタートとなる予定ですので、会員の皆様にはもう少しお待ちいただければと思います。

さて、今年（2014年）は世界結晶年という記念すべき年ですが、それとのタイアップとして、学会誌の表紙に1年間ロゴを掲載いたしました。また結晶年を記念した特集号を企画する上で、ワーキンググループ（吾郷委員、佐賀山委員、野澤委員、藤田委員、綿貫委員）を組み、枠組みや

執筆について議論いたしました。その結果「結晶と放射光」と題して、本号掲載に至りました。

日頃の編集作業では、例えば私が専門する物性物理と同じ分野の記事でさえも、実験手法が異なったとたん理解が困難になることがよくあります。そのような中、執筆者の方々には、多大な努力によって上記の編集方針に沿って、他分野の研究者にも理解しやすい記事を書いていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。また会員の皆様にも、ぜひお近くの編集委員にお気軽に声をかけていただき、テーマや記事についてのご提案、ご意見等をいただけますと幸いです。

まだ冊子体を廃止して完全電子化するという課題が未解決のままです。現状では、完全電子化が大幅な予算改善に直結するような案はまだ見つからないためですが、今後この問題についても編集委員会で議論するとともに、会員の皆様のお知恵をいただきたく思います。

大学業務や研究活動を行う中での編集作業は大変ではありますが、事務局の佐藤様には綿密な事務作業等ご尽力をいただいたおかげで、問題なくすすめることができいております。ここに感謝いたします。今年10月より、一部のメンバーが入れ替わり、新体制となりました。2年目もさらなる団結力をもって会員の皆様により良い記事をお届けすることが出来るよう努力して参ります。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

## 渉外幹事この一年

濱 広幸 (東北大学)

2013~2014年度の渉外幹事の取り組みとして、年度当初の2013年10月に、世界結晶年への対応、学会 HP の英語化、国外関連団体・国内他学会との連携といった活動方針を掲げました。この1年の活動について振り返ります。

まず、世界結晶年への取り組みとしては、2014年1月の年会の中で世界結晶年にちなんだ企画講演として、企画講演4「Crystallography in Photon Science」が企画・開催されました。この企画講演は、結晶学の創世から1世紀となる世界結晶年の2014年を迎え、放射光科学と結晶学の協奏的発展について X 線結晶光学を軸に概観するという趣旨で企画され、分光結晶、ミラーにおける結晶精密加工、結晶による偏光制御、光のコヒーレンス利用といった放射光学会ならではの視点で世界結晶年を取り上げたユニークな企画講演となりました。また、学会誌「放射光」の表紙に世界結晶年のロゴを1年間掲示しており、本号(11月号)では、特集「結晶と放射光」が掲載されています。

学会 HP の英語化は、今後学会の国際化を進めること、特にアジア・オセアニア地域の放射光研究者の日本放射光学会への参加を促進するために重要な取り組みであると位

置つけています。しかしながら、これまで学会 HP の英語サイトは全く整備されていなかったため、前期学会執行部で日本語 HP の更新を担当された先生方(木村洋昭さん(JASRI)、引間孝明さん(理研)、平木雅彦さん(KEK)、松下智裕さん(JASRI))に、渉外委員会委員として引き続き英語 HP の準備をご担当いただきました。特に和文コンテンツの英語翻訳では、JAEA の James Harries さんが大部分の作業を担当されました。本委員会の作業により、現在、学会の英語 HP 上には、年会開催、学会誌、入会といった情報が掲載されています。今後も継続的に英語 HP のコンテンツの充実をはかる予定です。作業をご担当いただいている渉外委員の皆様、この場をお借りして感謝いたします。

国内外の関連団体との連携については、アジア・オセアニア放射光フォーラム(AOFSRR)を通じた近隣各国の放射光コミュニティとの連携、SPring-8 で開催されているケイロンスクールの開催支援を引き続き進めており、また国内の他学協会と連携した各種イベント・講習会等の共催、協賛を積極的に行っています。

## 会計幹事この一年

木下豊彦 ((公財)高輝度光科学研究センター)

村上会長より、会計幹事を引き受けてもらえないだろうかという打診を受け、間もなく1年が過ぎようとしています。私自身は太田会長の時代(2001~2002年)に庶務幹事を務めさせていただきましたので、2度目の幹事を経験させていただくことになりました。

学会の事業は、年会合同シンポジウムのほか、若手研究会や講習会などのイベント開催、会誌など出版物の発行など多岐にわたります。放射光科学の発展と会員のメリットになるような活動のために、効率よい予算執行が求められています。幸い、これまでの会計幹事の先生方の努力と皆様のご協力により、学会の財政状況は健全であるように思えます。しかし、最近のように、次世代放射光施設の建設の機運が盛り上がってくるなど、情勢の変化に応じて、

学会としての意見を議論する委員会の開催など機動的な予算の執行が求められることも多く、予算的には予断を許さない状況であります。また、今年4月からは消費税が8%に上がり、次年度以降さらなる増税も予定されているところです。アジアオセアニアフォーラムなど、国際的な放射光コミュニティへの貢献も期待されているところです。

このような情勢の中、次回の放射光学会年会、合同シンポジウムからは、非会員の参加費の見直しを行わせていただくことになりました。その中で、協賛団体の中で、会費をお支払いいただく特別賛助会員の団体所属の参加者とそれ以外の団体からの参加費に差をつけさせていただくことになりました。会員の皆様におかれましても、ぜひ身の回りの方に、会員になっていただけるようおすすめいただく

---

とともに、特別賛助会員にもなるべく多くの団体が加わっていただけますよう、お口添えをお願いできればと思います。

また、放射光学会が出版している、「放射光ビームライン光学技術入門～はじめて放射光を使う利用者のために」に関しても、引き続き周りの方におすすめていただければと

思っています。集中講義や、講習会、参加される学会などでも宣伝していただければ幸いです。

残りもう1年の任期ですが、放射光科学やコミュニティにとって、いろいろ良いニュースが出てくることを期待しつつ、幹事の仕事を進めさせていただき所存です。

よろしく願いいたします。